

「未来の教室」
コモン・ルールブリック
まえがき

ルーブリックとは

- 定性的な対象を何とか評価しようとする試み。
- 目的に照らし合わせた「成功」の度合いを示す数値的な尺度と、それぞれの数値に見られる認識や行為の質的特徴を示した記述からなる評価基準表。
- 学習者が生み出したアウトプットをレベル別に分類し、レベルごとにみられる特徴を読み取ることによって作る
(→つまり本来は事後的に作成するもの)。
- その際、複数の採点者の点数とその根拠のすり合わせが必要。
- 実践の中でより多くのアウトプットが集まるにつれて再検討されるべきもの。
- 各レベルごとに、典型的なアウトプット例を付す。
- 学習者と共有され、学習者自身の評価行為への参加を促す。

「未来の教室」のためのコモン・ルーブリック

- 実際には、各事業者と協力校の行う学習プログラムごとに異なるルーブリックが必要である。
- 本ルーブリックは、そのための土台となる、一般的、汎用的ルーブリックという位置付けである。
- また、今回提示するルーブリックは評価「基」準（＝採点に直結するもの）ではなく、あくまで評価「規」準（＝採点のもとになる評価の考え方を示すもの）である。
- 現場で実際に使える評価「基」準をどう作っていくか、使い方のマニュアルのようなものを作るかどうかは今後の課題である。
- さらに、「指導と評価の一体化」「主体的学習者を育成するための評価プロセスへの学習者の参画」も今後の視野に入れる。

本ルーブリックのコンセプト

- 本ルーブリックが「願い」としているのは、学習者一人ひとりが、今このとき、そして生涯に渡って、さまざまな場面で個人（自分・他人の双方）と社会のウェルビーイングを重ねあわせて考え、いずれかを犠牲にすることなく、すべてをともに達成できるように行動し続けることである。
- 「ウェルビーイング」とは「善く在る」、つまり端的に言えば「幸福」という意味である。
- OECDもまた、これからの社会を担う人材を育成する目的として、「個人と集団のウェルビーイング」を最重要視している。
- この「個人と社会のウェルビーイング」を達成するために欠かせないのが、学習者一人ひとりが自分・他人の双方ならびに社会に責任を持ち、それらを大切に作る姿勢を持つこと、すなわち、自分の学びに「オーナーシップ」を持つこと（「自分ごと」「自分たちごと」として考えること）である。
- それこそが、ルーブリックの3つの大きな柱の一つである「幸せな未来の創造のために、他者と協働し、学びを評価・改善し続ける力・人間性」の内実であり、目的でもあるのではないだろうか。
- そしてそれを実現するためにこそ、「未知の状況から本質的な課題を発見し、創造的に解決に取り組む・思考・判断・表現力」が求められるのであり、さらにはそのためにこそ、学習者には「実社会の課題を解決するために、教科を横断して活用できる知識・技能」が必要とされるのである。
- このことを明確に主張するために、「未来の教室」のルーブリックにおいては、学力を記述する通常の文書とは異なり、上記の順序で、つまり「個人と社会のウェルビーイング」を最上位に置く形とした。

本ルーブリックにおいて大切なこと

- 実は「未来の教室」のルーブリックにおいては、私たちは「レベル（段階）」についての考え方を改めなければならない。ルーブリック案ではレベル1、2、3、4と、「段階を踏んで上達していく」というストーリーでレベルを説明してきた。もちろん従来の学習感に沿うならば、これはごく自然なことである。しかしこれはある意味、従来の学習観から「未来の教室」の学習観に無理なく移行できるようにそのような説明をしたにすぎない。
- 「個別最適化」を本気で掲げるならば、本当に大切なのは、どのレベルの学習者にも本来上下関係はなく、「学習者であるというだけで等しく尊い」という認識を自他共に持つことではないだろうか。
- もういいかげん、「レベル3や4に達するまでは準備期間、我慢期間、下積み期間だ、表に出ずに隠れておこう」などと捉えるのはやめよう。そんな単線的な学習観に基づく上下関係からは脱して、どのレベルであろうと最前線に立つ実践者であり、これからの時代を共に生き抜き、共に創っていく学習者として互いに等しく尊重し合おう。そう考えるべき時代が来ているのではないか。
- このことこそが実は「個別最適化」を目指す「未来の教室」の、隠れた重要なメッセージなのである。

「未来の教室」
コモン・ルールブリック

「未来の教室」ルーブリック

「未来の教室」で育成したい資質・能力		段階	1	2	3	4
		名称	スターター	マスター	チャレンジャー	チェンジ・メイカー
幸せな未来の創造のために、 他者と協働し、学びを評価・ 改善し続ける力・人間性	オーナーシップ (自分と社会に責任を持ちそ れらを大切にす姿勢)		自分自身を意味のある存在と捉えること、 また、社会の成員としての自覚を持つことに 困難を感じている。なぜそう感じているのか を考える必要がある。	自身を意味ある存在と捉えている。また、 社会の成員としての自覚を持っている。	少なくとも1つの場面で、自身と社会のウェルビーイングを 重ねあわせようとし、両方達成しようとする姿勢または 行動が見られる。	多くの場面で、自身と社会のウェルビーイングを 重ねあわせて考え、両方達成するよう行動し続ける ことができる。
	学習の自己調整能力・ 学習転移能力 (学び方を学ぶ姿勢)		学ぶ目標を自分で立てることができない。 なぜ学ぶ目標が大切なかを理解する 必要がある。	学ぶ目標を立てることができる。	創造行為を振り返り、次に何をどのように学ぶべきかという 未来の学習課題に部分的に結びつけている。 自分が現在何をどの程度修得できているのか、課題を 達成するためにはさらに何をどの程度修得すればよいかを ある程度把握し、差を埋めるための学習行動がみられる。	創造行為を振り返り、自分が現在何をどの程度修得できている のかを的確に把握した上で、次に何をどのように学ぶべきかと いう未来の学習課題を創造的に見出すことができる。 自分が何をどのように学んだかという学びのプロセスを 把握し、学びのプロセスをより進歩させたり、他の課題や 科目に取り組む時にもその学びのプロセスを応用できる。
	学びの抽象化力・応用力		まず、学んだことの内容を理解する 必要がある。	学んだことの内容を理解している。	学んだことの内容を理解し、ある程度抽象化することは できる。獲得した知識やスキルの一部を、創造行為に 活用している。	学んだことの内容を十分抽象化し、他の学習においても 活用できる。獲得した知識やスキルを、創造行為に十分 活用できている。
	他者との協働力		学びの場面で、他者との関係を築くことに 困難を感じている。なぜそう感じているのかを 考える必要がある。	集団の中で1人で課題解決に向けて 取り組むことができる。	集団の中で自分の役割を発見し、チームへ貢献することが できる。	チームビルディングに積極的に関与し、自分と他者の強みを 活かして、チームで大きな課題を達成できる。また、チーム の外のより広い範囲の他者との関係を作ることができる。
未知の状況から本質的な 課題を発見し、創造的に解決に 取り組む思考・判断・表現力	課題発見力		教授者から与えられた課題を的確に理解する 必要がある。	教授者から与えられた課題をそのまま 使っている。	教授者から与えられた課題を、自分が取り組みやすい形に 変換して取り組むことができる。	教授者から与えられた「問い」から、真の課題を発見する ことができる。また、課題を取り扱い可能な大きさに 分割して理解することができる。
	思考力		対象について何らかの説明をしている。	対象について論理的に説明しようとしている。	対象について説明できるが、データ、事実、法則等の根拠、 もしくは推論が他者に説明可能な論理性を備えて いなかったりする。	対象をデータ、事実、法則等の根拠に基づいて分析・ 評価し、他者が理解できるような論理的な記述によって、 その本質を明らかにすることができる。
	判断力		目的とは何か、手段とはなにか、ということ を理解する必要がある。	目的を設定したり、それを達成するための 手段を選ぼうとしている。	目的を設定し、それを達成するための手段を選んでいるが、 効果性や実現可能性についてよりよい手段が残っている。	目的を設定し、それを達成するための効果的で実現可能な 手段を選ぶことができる。
	表現力		自分の意見を文章にすることはできるが、 他者に対して意見を表明するまでは至らない。	他者に対して意見を表明できる。	他者に対して意見を表明する時、一通りの表現や コミュニケーションの手段を活用することができる。	他者に対して意見を表明する時、他者への想像力を十分に 持ち、わかりやすく、魅力的・印象的で、説得力のある 表現やコミュニケーションの手段を活用することができる。
	創造力		まずはどのような前例があるかを学ぶ 必要がある。	パターン化された前例にあてはめて 考えることができる。	既知の知識や技能を組み合わせるなどして活用すること によって、新規性・独創性は十分でなくとも、何らかの手段、 作品、活動、知識、概念等を作り出すことができる。	既知の様々な単元や教科の、あるいは学校での学習範囲以外 の知識や技能を活用することによって、全く新しい作品、 活動、知識、概念等を創造したり、事実や法則性を発見 したりすることができる。
実社会の課題を解決 するために、教科を横断して 活用できる知識・技能	知識		基礎的な知識を学習する必要がある。	基礎的な知識を身につけている。	すべてではないが、重要な知識については身につけており、 それらの一部をある程度他者に説明できる。	知識を幅広く身につけており、かつそれらを他者に適切に 説明できる。また、獲得した知識と、実社会での活用方法を 関連付けることができる。
	技能		基礎的な技能を学習する必要がある。	基礎的な技能を身につけている。	すべてではないが、重要な技能については身につけており、 それらの一部をある程度他者に教授できる。	技能を幅広く身につけており、かつそれらを他者に適切に 教授できる。また、獲得した技能と、実社会での活用方法を 関連付けることができる。
	異なる知識・技能の結合		まずは基礎的な知識・技能を学習する 必要がある。	知識・技能を単独で用いることができる。	少なくとも1つの場面で、異なる知識・技能を 組み合わせている。	必要に応じて、様々な知識・技能を組み合わせ活用 することができる。